

SX-89 構成礫



SX-90 検出状況



SX-90 土層断面



SX-90 完掘状況



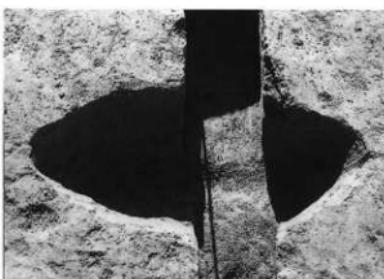
SX-91 検出状況



SX-91 検出状況



SX-91 土層断面



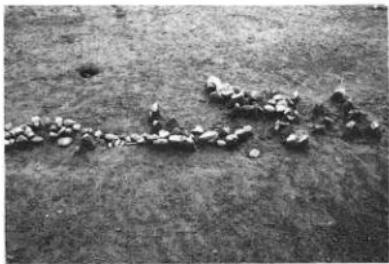
SX-91 完掘状況



SX-92 検出状況



SX-92 検出状況



SX-92 検出状況



SX-92 土層断面



SX-92 完掘状況



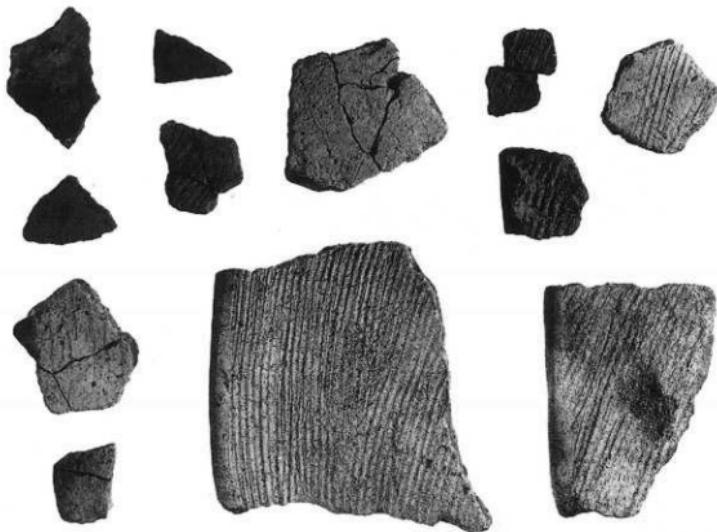
SX-93 検出状況



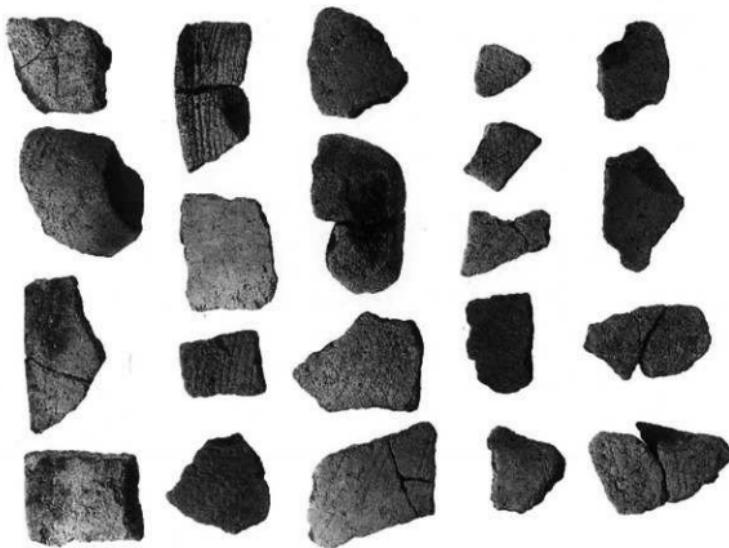
SX-93 検出状況

図  
37

出土土器(遺構内)



出土土器(遺構内)





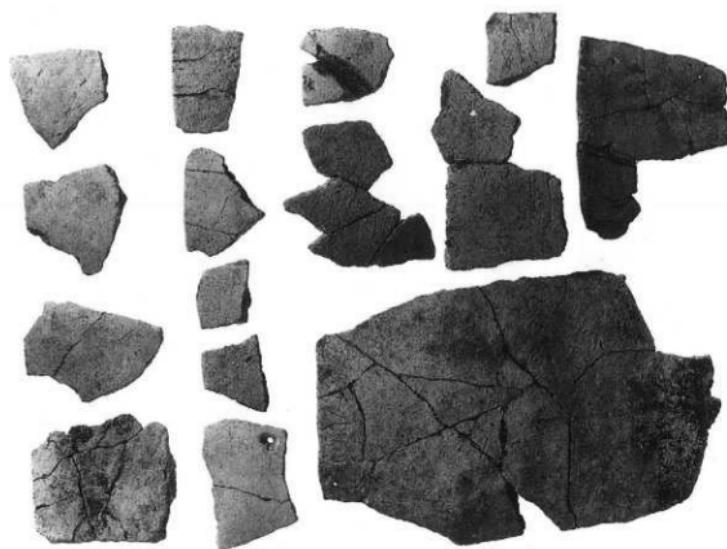
出土土器(遺構内)



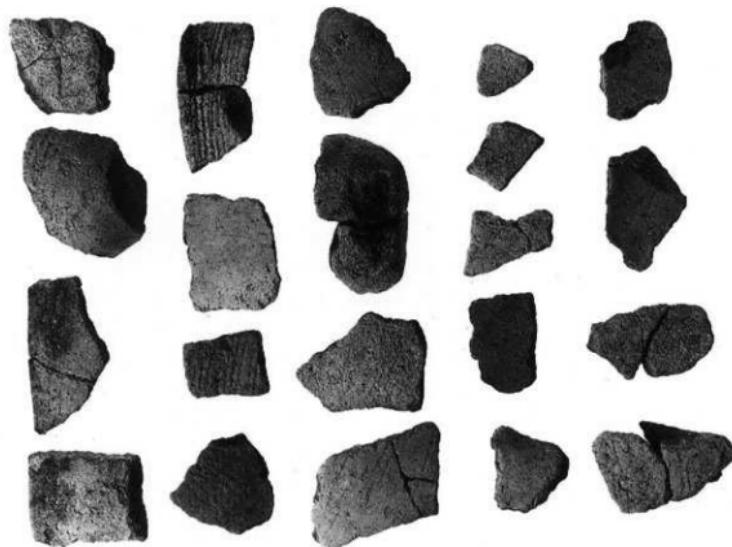
出土土器(遺構内)

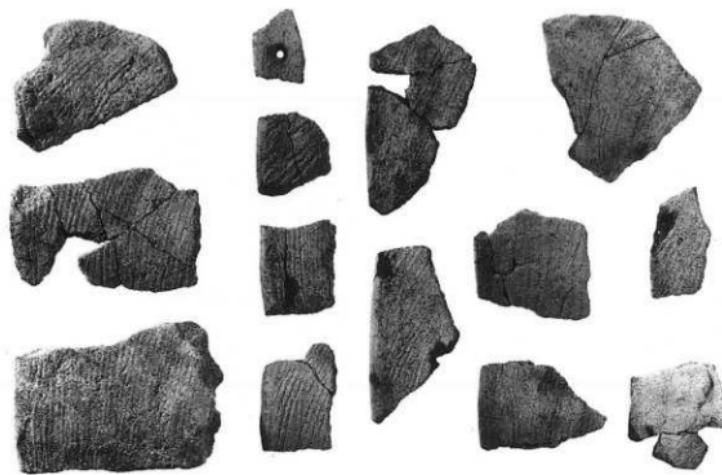
図版  
39

出土土器(1類)

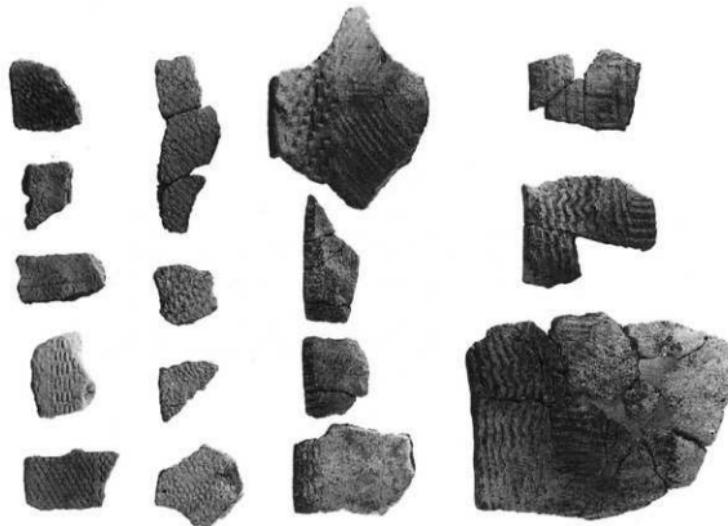


出土土器(遺構内)





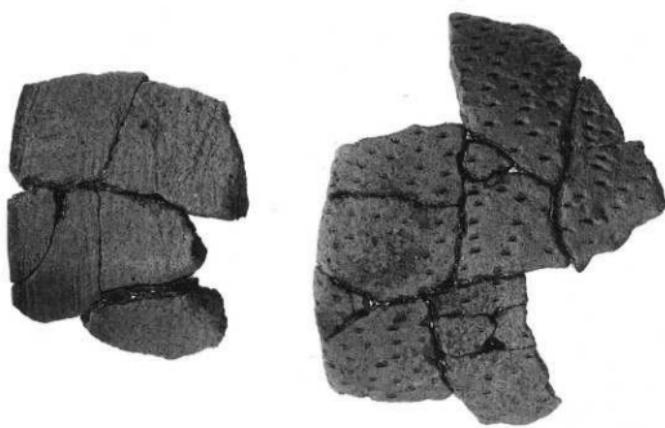
出土土器(VA類)



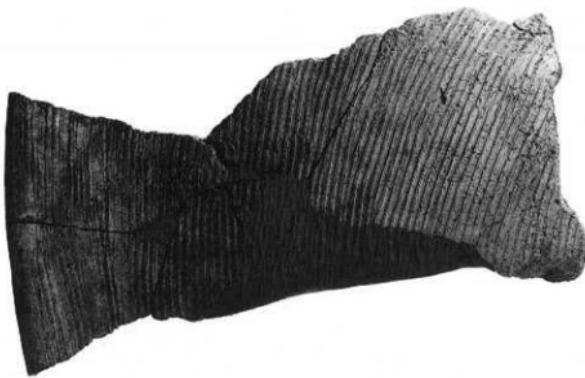
出土土器(II・III A・III B・IV類)

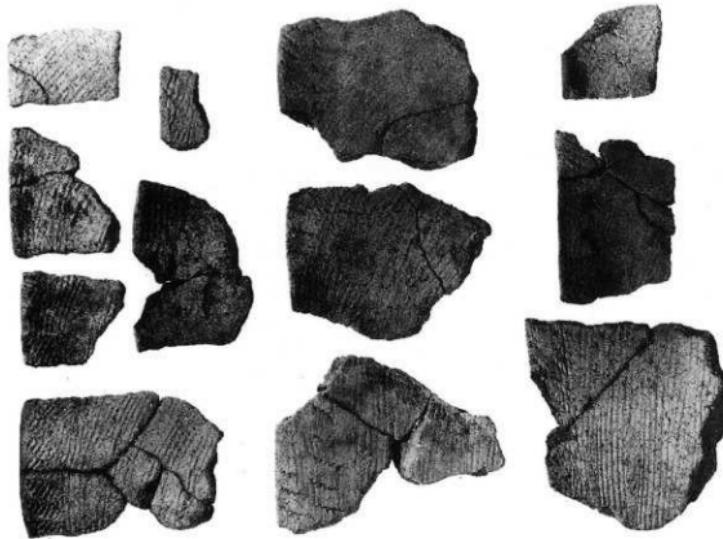
図  
41

出土土器(VA・VC類)

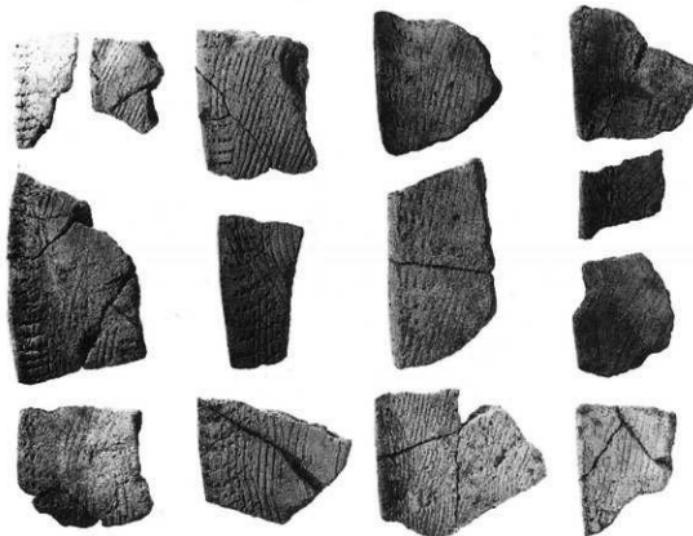


出土土器(VA類)





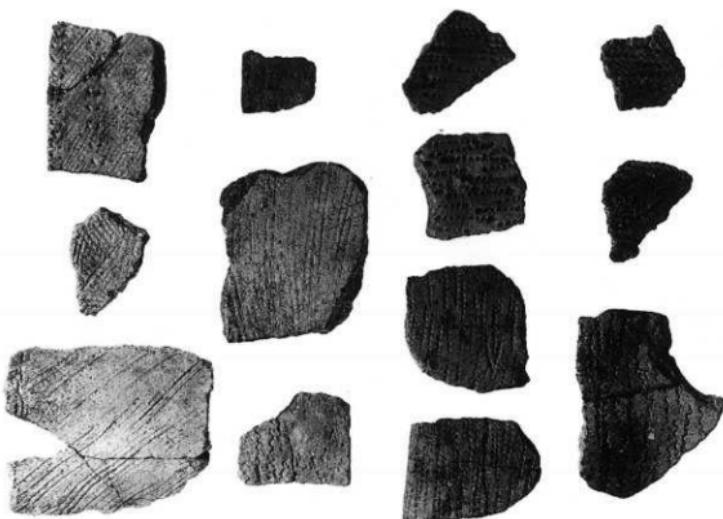
出土土器(VB・VCM)



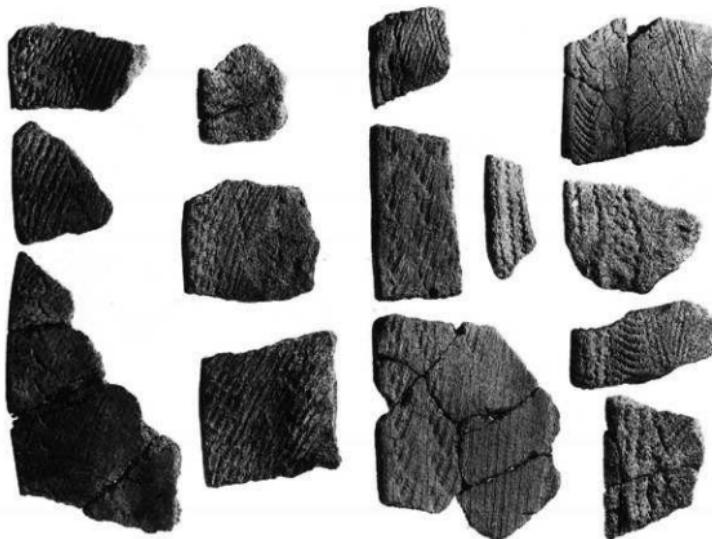
出土土器(VB類)

図  
43

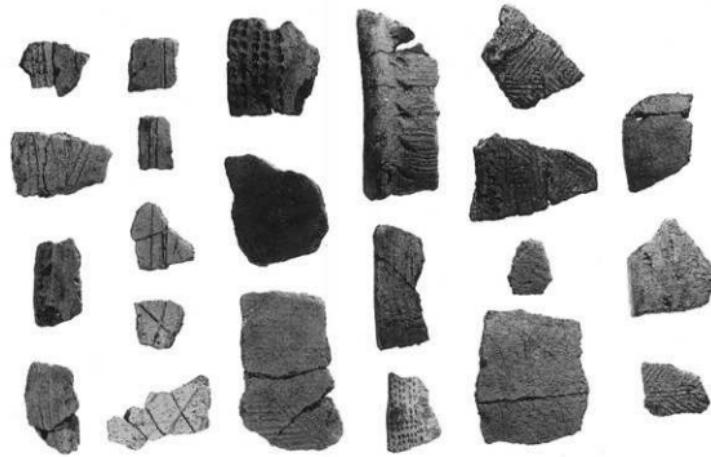
出土土器(VE・VI類)



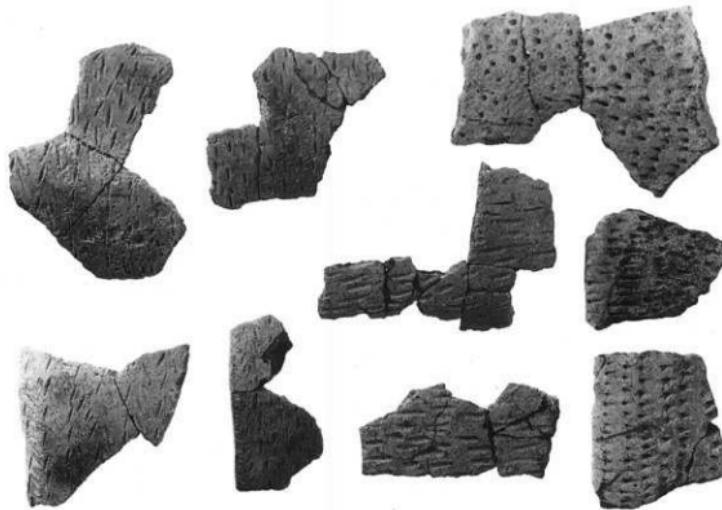
出土土器(VC・VD類)



全形図

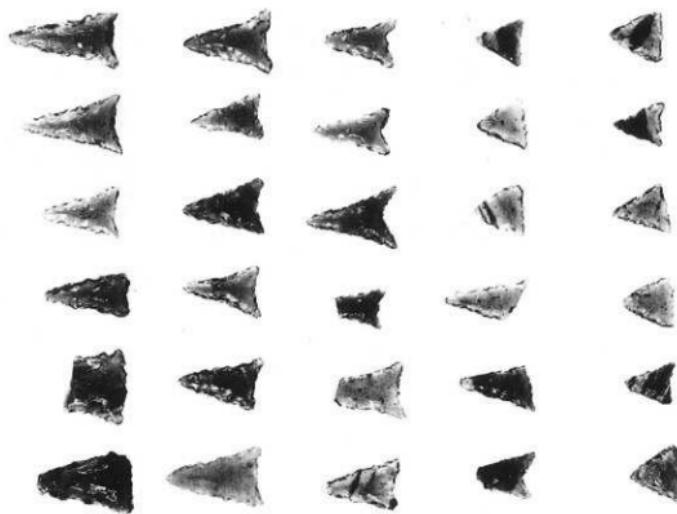


出土土器(Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ類)

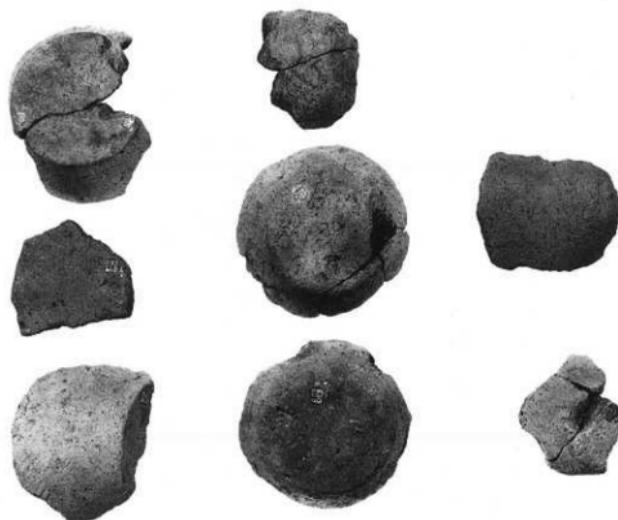


出土土器(Ⅺ・Ⅻ・Ⅼ類)

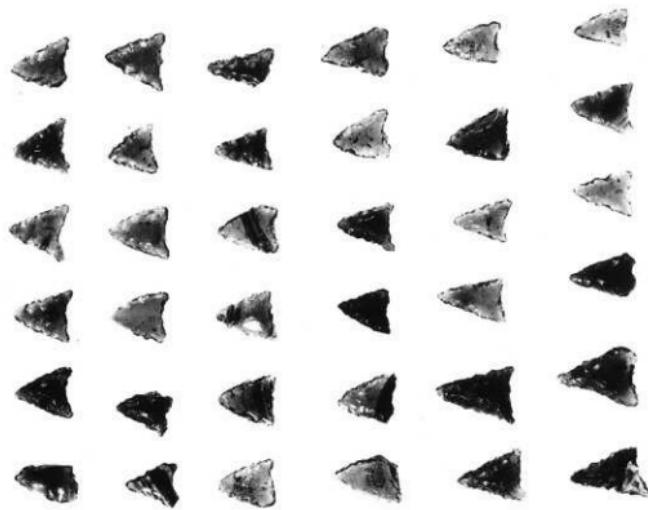
版図  
45



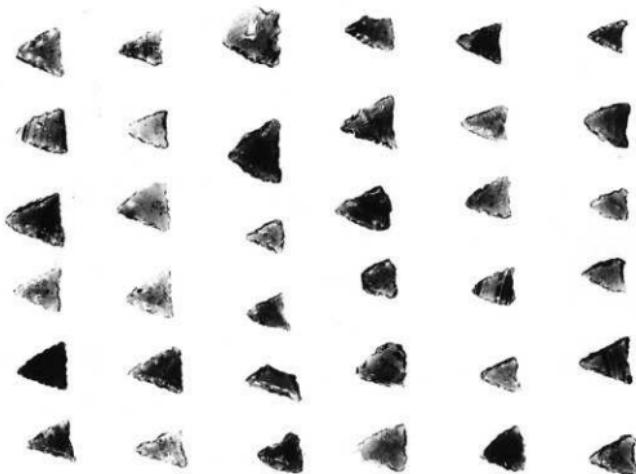
出土石器(石鏃)



出土土器(XI類)



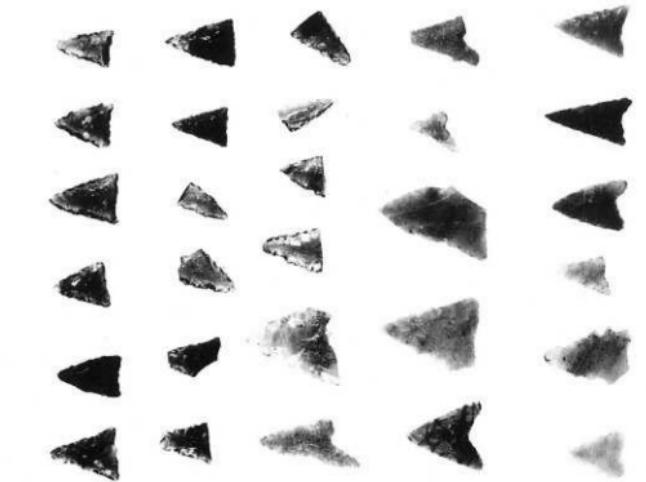
出土石器(石镞)



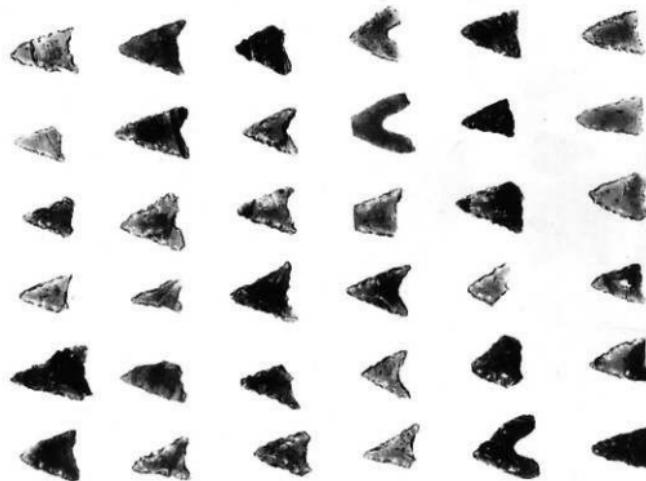
出土石器(石镞)

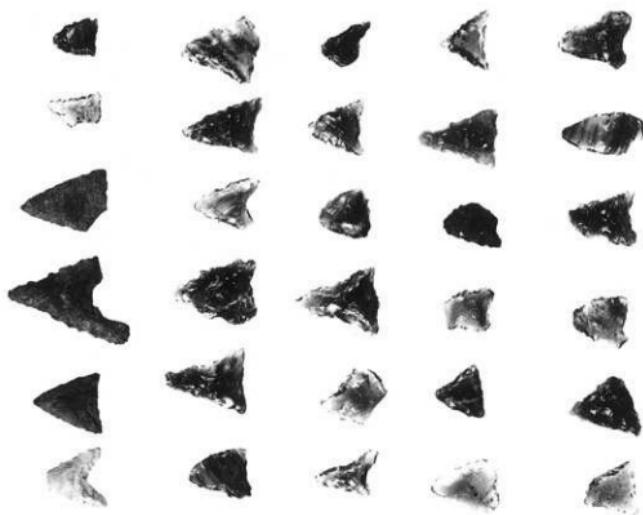
図版  
47

出土石器(石鏃)

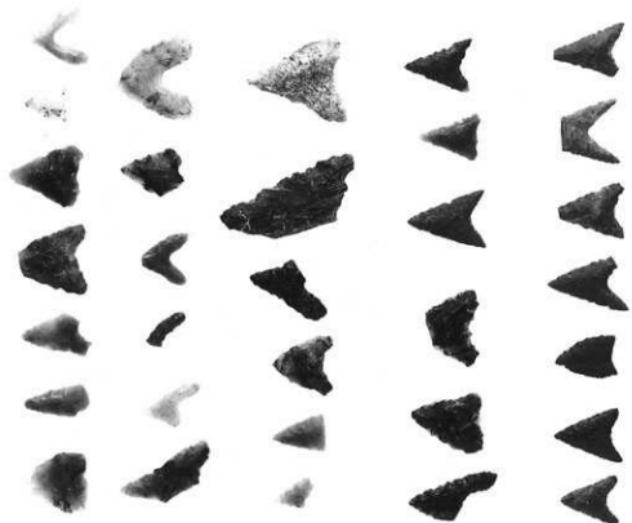


出土石器(石鏃)





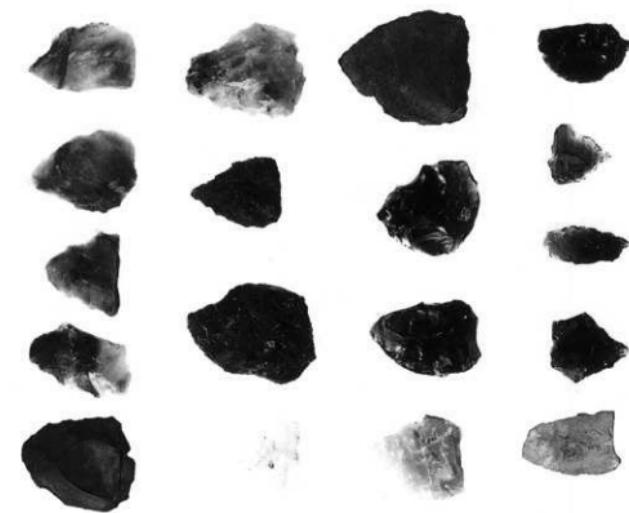
出土石器(石鏃)



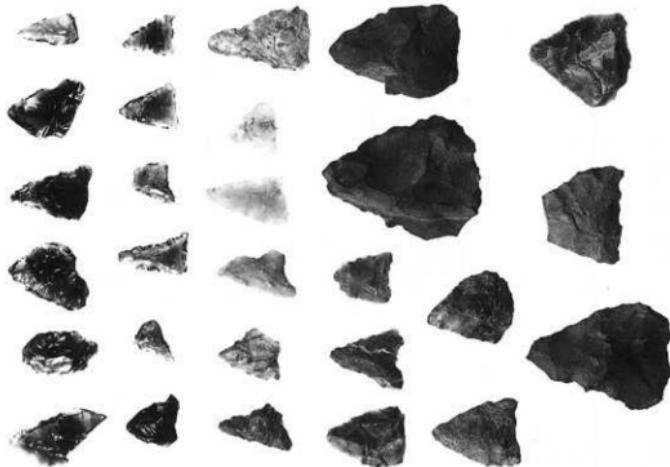
出土石器(石鏃)

図  
49

出土石器(尖頭状石器・石錐)

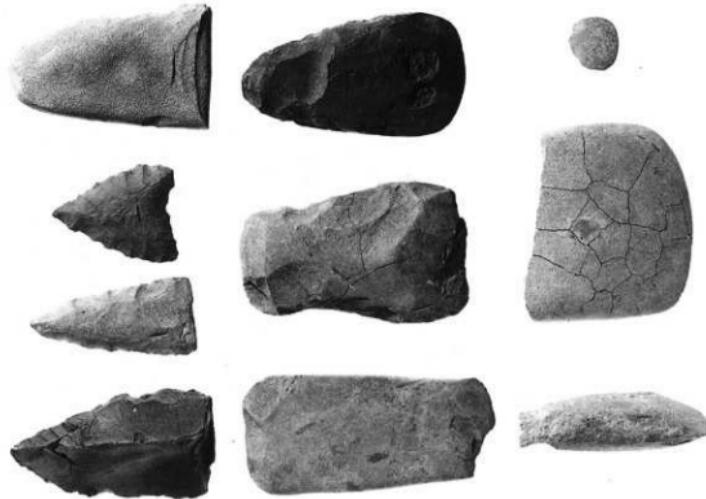


出土石器(石鏃・尖頭状石器)





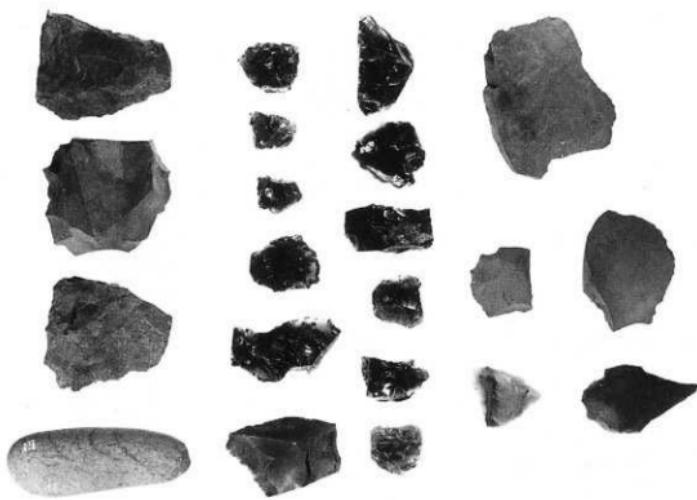
出土石器(剥片石器)



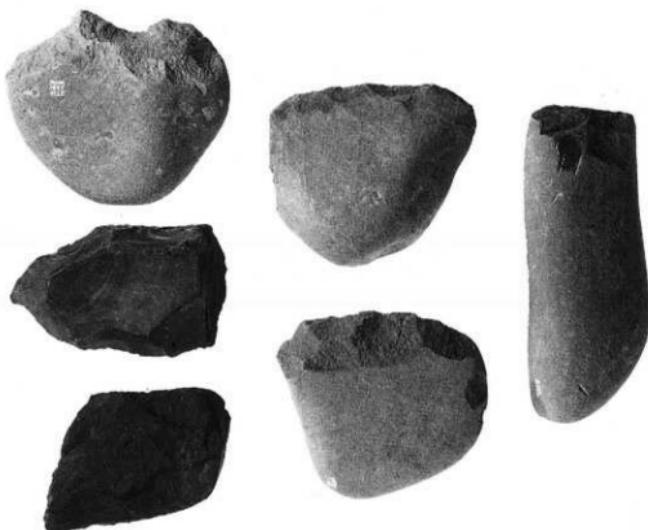
出土石器(剥片石器)

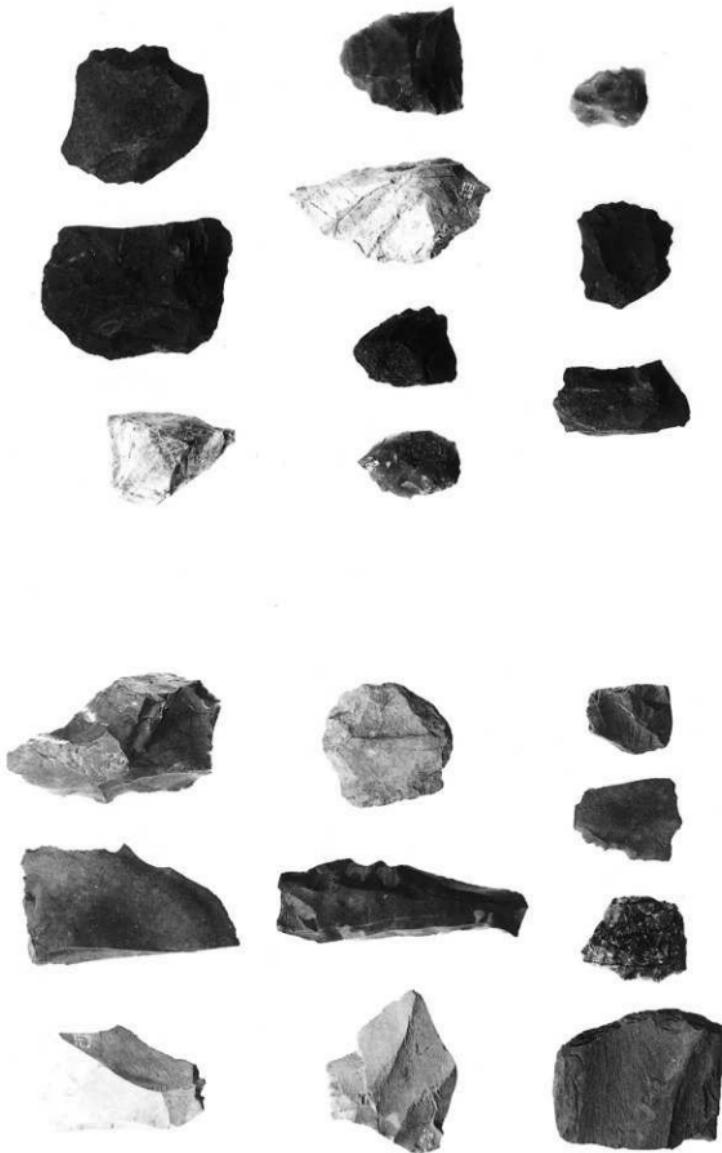
51  
図版

出土石器(剥片石器)



出土石器(剥片石器)



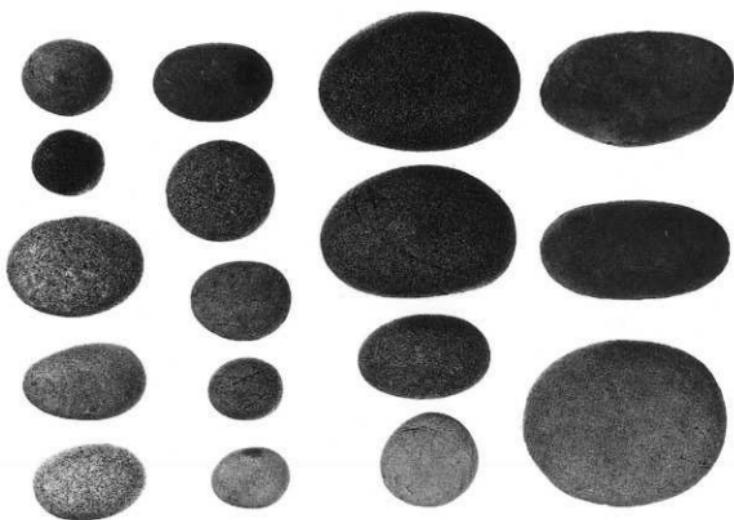


出土石器(刮片石器)

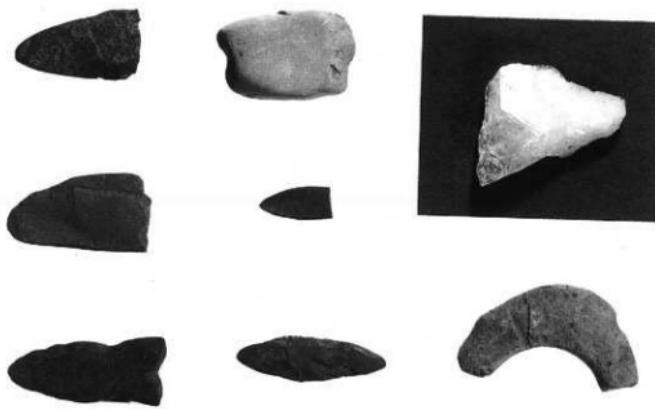
出土石器(刮片石器)

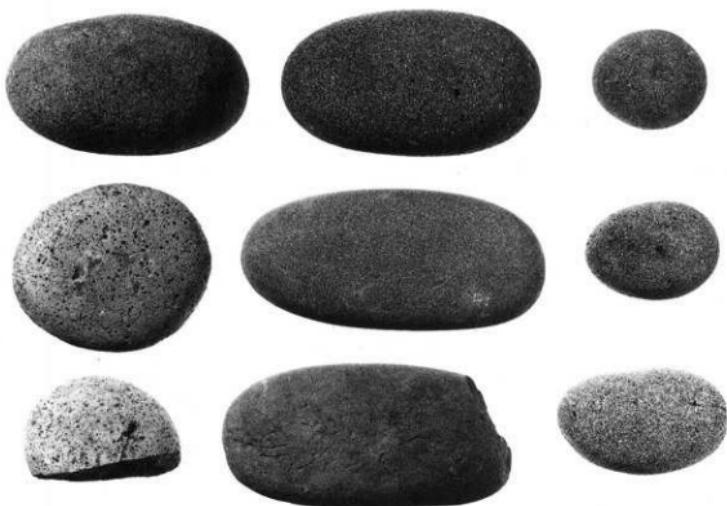
53  
図版

出土石器(磨石)

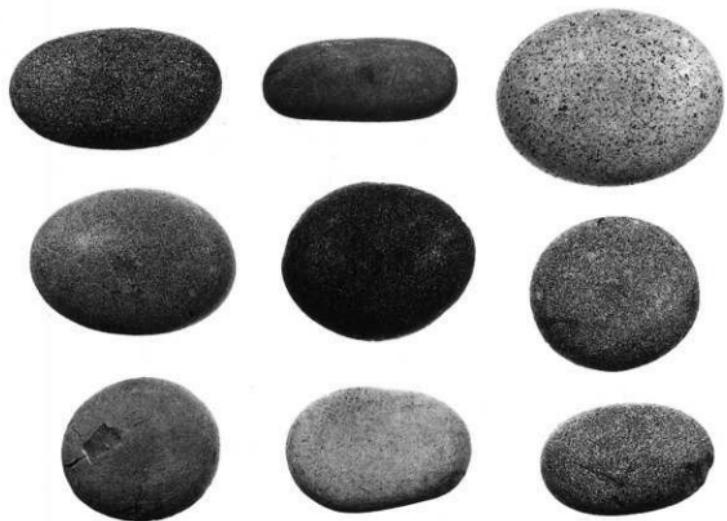


出土石器(剥片石器)



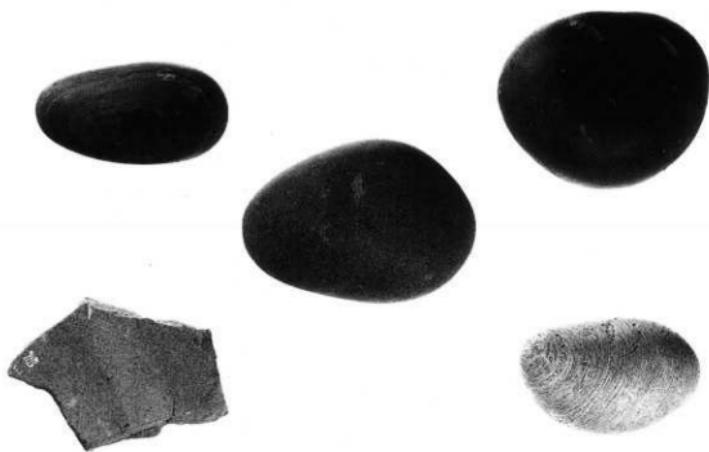


出土石器(磨石)

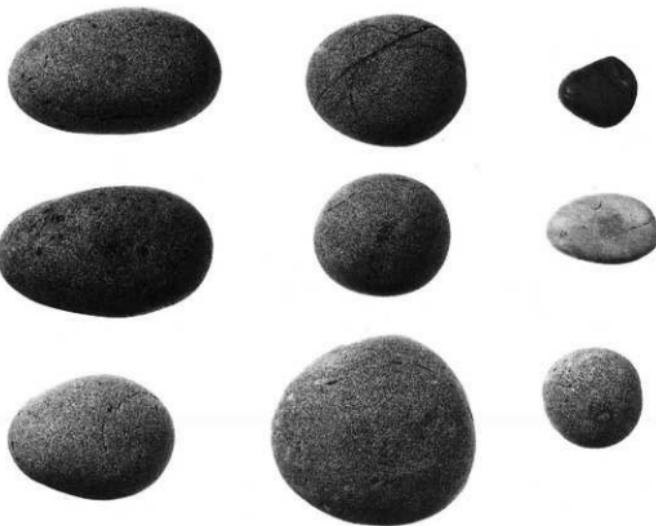


出土石器(磨石)

出土石器(用途不明石器)



出土石器(磨石)



## 第VI章　まとめ～縄文時代早期を中心として～

県営畠地帯総合整備事業鹿村野地区に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成12年度のズクノ山第1遺跡をもって終了した。本報告書の刊行にあたり、周辺遺跡と対比させながら、これまでの成果をまとめたい。なお、弥生時代については、ズクノ山第1遺跡の小結で既に触れているので、ここでは旧石器～縄文時代を対象とする。

### 旧石器時代～縄文時代草創期

台地内でも最も古い遺物は、ズクノ山第2遺跡F地区e区Ⅶ層～Ⅸb層の石器群である。本来は丘陵上に残され、ATが丘陵の斜面に滑り落ちる過程で、層中に混入したと考えられる。石材はホルンフェルスを主体としており、出土石器の殆どは、同一母岩から不規則に剥離したものである。製品は、粗製のスクレイバーが2点のみであるため、具体的な時期は不明だが、出土層位からナイフ形石器文化期のいずれかに属するとと思われる。おそらく、分割礫を持ち込んで石器を作製し、製品のみ選んで持ち去ったと考えられる。

終末期の細石刃文化期は、細石刃がズクノ山第2遺跡のC地区とF地区で、各1点ずつ確認されている。C地区出土の細石刃は、小林降下軽石層の下層から出土しており、細石刃文化期でも古い時期にあたる。

旧石器時代は、台地全体を通して遺物の出土が少ないとから、短期間居住する集団が時折訪れた程度だったと思われる。こうした状況は、ナイフ形石器文化期～細石刃文化期を通して、恒常に遺物が出土する時屋地区とは異なる。

縄文時代草創期は、隣接地である椎屋形第1遺跡や、白ヶ野第2・第3遺跡では、爪形文を有する土器が出上しているが(註1)、鹿村野台地からは全く確認されなかった。

### 縄文時代早期

前ノ原第2遺跡とズクノ山第2遺跡E地区で、どちらもI類に分類した土器は、押型文土器に先行ないし同時期の土器群とした。近年、草創期後半の土器型式として設定された水迫式土器は、草創期隆蒂文系土器群と、貝殻文系土器群を擴ぐ型式と認識されている(註2)。町内では、水迫式及び後続する前平式土器が複数遺跡から出土していることから、草創期後半から早期前葉にかけての田野盆地は、汎南九州的な貝殻文系土器群の影響下にあると考えられてきた。しかし、この一群は、貝殻文系土器群とはかけ離れた特徴を備えており、縄文時代早期初頭の田野盆地を巡る土器群の動態が、一元的な観点では説明できないことを示している。ただし、分布・編年的位置付けや、前ノ原第2遺跡における初期押型文欠如の背景は、現時点では不明であり、今後に残された課題といえよう。

初期押型文は、少量ながらE地区で出土している。この土器は、編年的には川原田Ⅱ式となる(註4)。これまで、町内では幾つかの遺跡から確認されている。前出の無文土器群との関係はさておき、西日本一帯に拡散する押型文土器の影響は、その初期段階から田野盆地内に及んでいたことは確かである。なお、この時期は南九州の土器編年上では加栗山式～倉園B式にあたると